

「可愛い町娘(*das süße Mädel*)」の自殺，そして復讐

シュニッツラー文学に見る身分制秩序の破綻と崩壊

武田智孝

「私はいったい何なの・・・?(*Was bin denn ich...?*)」

シュニッツラーの戯曲『戯れの恋(*Liebelei*)』¹[1895]は、上流社会の青年フリッツの二つの恋の同時的破局を描いた芝居だが、彼の二人の恋人にとって、破局の様相はあまりにも異なる。

フリッツは地方の大地主の御曹司で学生、予備役の将校でもある。上流社会の人妻との間に悩み多い情事を抱えているが、他方、その憂さを晴らすべく、友人に勧められて「可愛い町娘」を紹介してもらい、後腐れのない「気晴らし」的恋愛に癒しを求めている。上流夫人との不倫の恋が難しい局面に至っているのは、一つには、その夫人の気性や性格にも原因があるようだが、もう一つは、彼らの秘密がすでに彼女の夫に知られているのではないかという不安に怯えているせいでもある。予感は的中し、フリッツは決闘の申し込みを受けて、命を落とす。

ノルベルト・エリアスが繰り返し述べているとおり、上流社会を他から区別する最も基本的な特徴の一つは「名誉(*Ehre*)」という概念で、「名誉」は *Satisfaktionsfähigkeit*(決闘資格)と結びついていた。上流社会は *die satisfaktionsfähige Gesellschaft*(決闘有資格社会)で、貴族、将校クラス以上の軍人、大学教育を受けた身分の高い官僚をはじめ知識階級、学生がこれに入る。名誉が傷つけられた場合には、相手が同じ階層に属している限り、武器を取って闘い、汚名を雪がなければならない。また、決闘を申しこまれた側も受けて立たねばならない。これが貴紳たる者の特権であると同時に、義務でもあった。² ちなみに妻の不倫によって傷がつけられるのは夫の名誉であって、夫は名誉回復のために不倫相手の男と決闘しなければならなかった。これらは不文律である。決闘は法律では禁止されていたが、官僚や軍人の場合は決闘することで出世・昇進が早められた。逆に、この掟に従わなければ、名誉を失ったとみなされ、上流社会から追放された。決闘が容易に絶えなかった道理である。

¹ 鷗外訳は『恋愛三昧』。

² Elias, Norbert: *Studien über die Deutschen*. suhrkamp taschenbuch wissenschaft, 1992, S. 61ff.

フリッツの二人の恋人のうち人妻の方は離縁されるかもしれないし、恋人が死んだことについては、悲嘆に暮れるだろうが、他ならぬ彼女のために夫と恋人が決闘した結果であるから、女冥利に尽きるとも言える。

しかし、もう一人の恋人、町娘のクリスティーネの方は、フリッツが別の女のために命を賭けて闘い、倒れたのである。

あの女人のために…彼が愛していた女人のために…それでその女人の御主人が…そうよ、その方があの人を撃ち殺したのだわ…じゃあ私は…私はいったい何なの? (was bin denn ich?) 私はいったいあの人にとって何だったの…? (L.261)³

台詞の中心には、愛するフリッツの死と並んでその裏切りから受けた衝撃と動揺がある。だが、せめて遺体には対面させてほしいと願っても、既に二日経っていて、葬式は終わり、埋葬された後なのだ。決闘についてはむろんのこと、葬式にも呼んでもらえなかった。墓前に祈りを捧げることさえ、人目をはばかって、控えるよう説得される。

テーオドア(フリッツの友人で、恋人のミーツィを介してクリスティーネをフリッツに引き合わせた青年)がとりなすつもりで、葬式は「ひっそりと行われたんです…ごくごく近い親族と友人だけが出席して…」(L.263)と言った時、クリスティーネは叫ぶ—

ごく近い…じゃあ私は…? 私はいったい何なの? (was bin denn ich?) (中略) 私はいったい何なの? 他のみんなより近しくないとも…? 親戚や、それに…あなたより近しくないともいうの? (L.263)

「私はいったい何なの? (was bin denn ich?)」という問いは四度繰り返されている。

最初の問いはフリッツが他の女人のために決闘して命を落としたことを知った直後で、「私はあの人にとっていったい何だったの? Was bin denn ich ihm gewesen…? (L.261) (強調引用者)」と言い換えられていることから明らかなように、恋人に裏切られた衝撃が中心である。しかし、二つ目の引用にある二度の was bin denn ich?は、故人にとって最も親しかつたはずの恋人である自分を、貧しい階層の町娘にすぎないという理由で、葬儀からさえ締め出してしまう身分制社会の非人間的な秩序に対して向けられた問いである。その問いからは「あの人にとって (ihm)」は消え、不実な恋人との関連から解き放たれている。

Satisfaktionsfähigkeit (傷つけられた「名誉」を決闘によって回復すること)を認められた「名誉」ある身分がある一方で、そのような「名誉」とは無縁の「決闘無資格社会(die satisfaktionsunfähige Gesellschaft)」、すなわち下層社会があった。可愛い町娘(das süße Mädchen)

³ Schnitzler, Arthur: *Liebelei*: In: *Gesammelte Werke, Dramatische Werke I*. Frankfurt a. M. 1981, S. 263. 以後 (L.数字) はここからの引用を指す。

たち、クリスティーネやミーツィはこの階層に属する。

身分制社会の論理からすれば、「名誉」ある上層社会の者たちが「名誉」をめぐる決闘をしても、そもそも「名誉」などとは無縁の下町庶民には関わりのないことである。決闘の一方の当事者フリッツがたとえクリスティーネの恋人でも、彼は上流社会の人妻との不倫によってその夫である上流社会の貴紳の「名誉」を傷つけ、「名誉の掟」に従って決闘に応じるのであるから、これはあくまでも「名誉」なき下層の町娘クリスティーネの住む世界の外で起きる出来事であって、彼女のあずかり知らぬこと、と見なされる。同じ都市に住んでいても、これが身分制社会の冷厳なる現実である。

恋愛も同様であって、「名誉」ある上流社会の子弟と「名誉」なき身分の下町娘の「恋」はけっして結婚にまで発展することはない。そういう暗黙の了解のうえに、それを前提にして成り立つひと時のお楽しみに過ぎないのである。

すでにこれまで「可愛い町娘」との気楽な恋を何度も経験してきたテーオドアにしてみれば、クリスティーネの反応は想定外のもので、彼が現在つきあっているミーツィならば、彼以前にすでに何人もの貴公子たちとアバンチュールを重ねて来て、ひと時の遊びと割り切っているから、悲しむにしても、これほど激しく取り乱したりはしないだろう。町娘と貴公子との「恋」の場合は、それが遊びのルールなのだ。クリスティーネはルール違反をやっているとも言えるが、彼女の恋は不幸にも戯れではなかった。

クリスティーネとて、フリッツとの恋がいつまでも続くとは思っていない、ましてや結婚にまで発展するとは夢にも思っていない。第二幕のフリッツとの対話の中で彼女は「あなたを縛るつもりなどないわ。縛ったりしないわ…あなたは私を捨ててもいいのよ、飽きが来れば、…あなたは何も約束しなかったし、私だってあなたに約束をねだったりしたことはないわ…そのあと私がどうなるか…そんなのどうだっていいことよ…私は一度は幸せだったんだし、それで私はじゅうぶんなの。」(L.253)と言っている。ここまでは、貴公子と「可愛い町娘」の恋のルールの枠にしっかりと納まっている。

だが、続けて、「私の願いはただ一つよ、あなた以前にはだれも愛したことはないし、いつかあなたに捨てられたあとでも、けっして誰かを好きになったりはしないわ、そのことだけはよく覚えていてほしいの。」(L.253)とクリスティーネが言うとき、通常の「可愛い町娘」らしからぬ純情一途な乙女心という自然が、身分制社会秩序の中のかりそめの取り決めに既に逸脱し始めている。

これが最終幕でのクリスティーネの「私はいったい何なの?」という憤りを含んだ問いへとつながっていく。世紀末ウィーンの町娘らしからぬ、あまりにもひたむきすぎる恋心がなければ、最終場面でのクリスティーネの怒りの告発にも似た真情吐露はありえない。健康で素朴な娘の一途な恋という輝ける自然が、世紀転換期における身分制社会の掟のあまりに反自然的な非人間性を暴きだし、糾弾している。それがあの最終場面だ。

「可哀そうな町娘(das arme Mädel)」

『戯れの恋 (Liebeleie)』はもともと *Das arme Mädel* (可哀そうな町娘)と題されるはずだった。⁴ 元の題の方にはほとんど自然主義的と言っていい傾向が色濃くにじみ出ている。

上流社会の子弟の気楽な遊び相手で、彼らの視点からは「可愛い町娘 (das süße Mädel)」だが、下層社会の視点から見ると「可哀そうな町娘 (das arme Mädel)」にほかならない。この間の事情を浮き彫りにしてみせているのが『戯れの恋』第二幕で、靴下編み職人の妻カタリーナ・ビンダーが縁談を持って来る場面だ。相手は亭主の従弟で、「定職」につき、「身持ちも固い」と売り込むのだが、クリスティーネは関心を示さない(gleichgültig)。洗練された上流青年フリッツとのデートで彼女の頭はいっぱいなのだ。

クリスティーネが出掛けた後、おかみさんは父親のヴァイリングにもこの話を「良縁」として持ちかける。長くなるが、その会話を引用したい。W はヴァイリング、K はカタリーナ・ビンダー夫人。

W: (….) どうしてあの娘はあんたたちと一緒に出掛けないのだろうか…

K: 分からないよ…あたしの亭主の従弟が一緒だからじゃないかねえ。

W: ああ、そりゃそうかもしれん。あの男には我慢できないのさ (Den kann s' nämlich nicht ausstehen.)。娘の口から聞いたことがあるよ。

K: ふーん、どうして厭なのかねえ。フランツって子はとても身持ちが固いし、今では定職にも就いているよ、これってきょう日じゃ良縁の口じゃないかねえ… (das ist doch heutzutage ein Glück für ein...)

W: …貧乏人の娘にはね… (Für ein...armes Mädel...)

K: どんな娘さんにだってそうですよ。

W: まあ、ねえ、ビンダーさん、花の盛りの娘にとって、たまたま定職にありついた身持ちの固い (anständig) 男ばかりが人生のすべてってわけじゃないでしょう。

K: いちばん利口な選択ですよ (Ist doch das Gescheiteste)。 (中略)

W: 若い娘は花の盛りを窓から投げ捨てるためにだけ生きてるわけじゃありませんよ。 (中略)ビンダーさん、あんただって青春をただむざむざと過ごしたってわけじゃないでしょう。

K: あの頃のことはもう何も憶えちゃいませんよ。

W: そんなこと言いなさんな… (中略)思い出こそがあなたの人生の宝じゃないのかね (die Erinnerungen sind doch das Beste, was Sie von Ihrem Leben haben.)。 (中略)うちの娘だつて…何も思い出すものがなかったら…娘にいったい何が残るって言うんだね。一生ずっと、幸せもなく恋もしらず、来る日も来る日もただ単調に過ぎて行くなら、その方

⁴ Scheible, Hartmut: *Arthur Schnitzler. Mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Hamburg, 1998, S. 57.

が幸せだとでも言うのかね。(L.243f.) (傍点引用者)

ウィーンの可愛い町娘，可愛く，屈託なく，健康で，上流社会の御曹司たちの気軽なアソビ相手として世に名高い娘たちの実情，哀しい舞台裏を，これほど容赦なく暴いて見せたテキストは他に見当たらないのではないか。

上の会話に *ein armes Mädel* という表現が出て来て，前後の事情から「貧乏人の娘」と訳したが，普通に訳せば「可哀そうな娘」である。貧しいだけでなく，自分たちの暮らしの圏外にしか，ときめき夢中になれる相手を見出せないという意味でも可哀そうなのだ。しかも彼女らはその貴公子たちのひと時のお楽しみのお相手にすぎない。彼らはやがて同じ身分の美しい令嬢たちと結婚して別の世界へと去って行く。それを承知でツキアイ，一瞬の輝きを生きて，その思い出を「最良の宝」として，その後の人生を下町のおかみさんとして地味に地道に暮らしてゆく。「可愛い町娘」，「可哀そうな町娘」のこれが現実なのだ。

しかもここで語っているのは当の本人ではない。その父親である。普通なら「いちばん利口な選択(肢)」を娘に薦める立場の父親が，同じ身分の堅実な若者との「良縁(*ein Glück*)」よりも，一年か半年で終わってしまうかもしれない上流社会の子弟とのアバンチュールを我が娘のために願うというのは，常識的には気違い沙汰である。しかしヴァイリングは，下層社会の堅実な若者との「良縁」が，「幸せもなく恋もしらず」ただ無事に毎日が過ぎて行くだけの灰色の人生に繋がることを承知しているのであり，それは「花の盛りを窓から投げ捨てる」に等しいと分かっているのだ。質素で真面目なクリスティーネのような町娘にとっても，フランツに代表される同じ階層の適齢期の男は魅力がない。貧乏暮らしがイヤというより，男として惹かれるものを何も感じないのである。

ウィーンの貧しい下町娘にとっては上層社会出身の少尉殿や学生でないと，心はときめかない。煌めく青春を味わえないのである。ミーツイの口からたびたび「粹な，いかす，カッコイイ」といった意味の *fesch* という言葉が発せられる。町娘の感覚だと，繊細な身のこなし，気の利いた会話，教養ある言葉使い，上品で洒落た衣服と着こなし，育ちの良さを感じさせる品のいい顔立ちなどを指す，讃嘆と憧れのこもった表現である。

劇場のしがたない楽師ヴァイリングの醒めた目には，ビンダーのおかみさんがいくら口先で否定しようとも，下層庶民の女にとって，花の盛りの娘時代に貴公子たちと遊び戯れた恋の，楽しくもほろ苦い思い出だけが唯一の救いであり「宝」であって，それがなければ，無にも等しい一生なのである。ヴァイリングの意見にシニシズムの影はなく，「いたってあっさり」と，悲壮感なしに (*sehr einfach, nicht pathetisch*) (L.244)とわざわざト書きに断わってあるとおり，そこにあるのはリアリズムだ。

『戯れの恋』はよくシラーの『たくらみと恋』に比較されるが，110年前の悲劇では，同じ楽師の父親が，貴族で宰相の息子フェルディナントとの関係で娘の身の上を案じて「若様はあの娘を口説き落として，孕ませたあげく，ドロンを決め込む，そうなりゃあの

娘は一生キズモノとして世間からつまはじきされ、一人身で朽ち果てるか、あだな商売にでも手を染めて、やっけて行くことになる」⁵と語っている。「キズモノとして世間からつまはじきされ」は *verschimpft* で、直訳は「名誉を傷つけられて」という意味である。

昔は、たとえしがたい庶民であっても、未婚の娘には *jungfräuliche Ehre*(処女性の「名誉」)があつて、これが失われると、厳しい社会的制裁が待ちうけていた。だからこそ、その発覚を怖れて、嬰児殺しが盛んに行われたのである。『たくらみと恋』でルイーゼの父親が語っているのはそのことである。

かつて未婚の娘に与えられ(押しつけられ)ていた *jungfräuliche Ehre* は今やどうなったのか。世紀末ウィーンではもはやそのような「名誉」、娘の純潔などは問題にならなかったのだろうか。

これは階層によって違つた。上流社会では依然として「名誉」を失つた女は「キズモノ (*Gefallene*)」と見なされた。処女性崇拜など「おとぎ話 (*Märchen*)」に過ぎないと頭では理解している進歩的な教養人士でも、なかなかそういう相手との結婚には踏み切れない、そんな雰囲気はまだ上流社会には残つていた。これをテーマに書かれたのが、シュニツラーの戯曲 *Das Märchen*[1894]である。

しかし下層庶民の社会は違つていて、げんに若い娘時代を「ただむぎむぎと過ごしたわけではない」ビンダーのおかみさんも今では靴下造り職人と結婚して一女の母に納まつている。『アナトール』では可愛い町娘について、„*In der Stadt werden sie geliebt und in der Vorstadt geheiratet...*“⁶と語られている。どう訳すかはともかく、意味としては「あの娘たちは都心で貴公子たちに愛人として可愛がられ、周縁部の下町で嫁に貰われておかみさんに落ち着くのさ」ということだ。

süße Mädels は *hübsche Mädels* とは違ふ。特殊な歴史的背景を持つた社会現象である。「処女性の名誉」だの「キズモノ」だのといった概念・制度から解放された下層社会の町娘たちは、いまだにそういう規範に縛られたまま、身動きの取れない上流社会の令嬢や貴婦人たちから締め出しを食らつた貴公子たちの受け皿になつた。貴婦人たちは内心では「可愛い町娘」を羨み、自分たちの不自由を恨んだが、他方では腹癒せから、「可愛い町娘」を単に身分が賤しいというだけでなく、ふしだらな罪の女として軽蔑した。軽蔑したのは令嬢や令夫人たちだけではない。上流社会全体が「可愛い町娘」を汚らわしいとして排除したのである。

可愛い町娘の〈抗議の自殺〉

フリッツと付き合い始めた頃のクリスティーネには、自分の立場がある程度は分かつて

⁵ Schiller, Friedrich: *Kabale und Liebe*. In: *Sämtliche Werke Band 1*. München 1987, S. 757f.

⁶ Schnitzler, Arthur: *Anatol*. In: *Gesammelte Werke, Dramatische Werke* □ Frankfurt a. M. 1981, S. 54.

いたであろう。

しかし「私はいったい何なの?」という最終場面での彼女の問いは、フリッツの裏切りだけでなく、彼の死も葬儀も彼女には無縁のことと見なし、墓参さえも許さないという身分制社会のあまりにも非情な秩序に対する、やり場のない憤りを表している。下層社会の娘は人間扱いされない、虫けら同然ではないかという思いが、口には出さないが、彼女の心に萌し始めている。

彼女以外にも同時進行的に本命の恋人がいて、その人妻のために命を賭けるというフリッツの振舞いによっても彼女の人格は既に十二分に踏みにじられていたが、そのうえ身分制社会の不文律によって残酷な仕打ちを受け、テーオドァに代表される上流社会の常識はそれを当然のことと見なし、父親やミーツィら下層社会も自らの境遇を甘んじて受け容れる姿勢だ。

クリスティーネの入水自殺は、恋人の裏切りと死の衝撃のみによっては説明し切れない。彼女をドーナウへと駆り立てたのは、身分制社会秩序全般に対するやり切れなさである。

西欧には東洋のように抗議の自殺とか憤死とかいった概念はない。自殺を罪と見なすキリスト教道徳が邪魔をして、自殺にそういう意味を与える考え方を受け入れず、現実から目をそむけている可能性がある。西欧的偏見に捉われることなく、クリスティーネの自殺に身分制社会の理不尽な掟に対する抗議の意思をも読み取るべきではないか。

彼女とよく似た最期を遂げるのは『遺志(*Das Vermächtnis*)』のトーニである。

経済学教授で国会議員アドルフ・ロザッティの一人息子フーゴーが落馬の事故で瀕死の重傷を負い、今わの際に、内縁の妻トーニと四歳の息子フランツがいることを家族に打ち明け、二人を引き取って面倒を見てくれるよう言い遺して死ぬ。家族は約束を果たそうと努めるが、上流社会の風当たりは強い。彼らは団結して事に当たろうとするが、間もなく病弱だったフランツが死ぬと、血の繋がりは断たれ、フーゴーの内縁の妻だった下層出身の女だけを家に住まわせることへの抵抗感が高まる。最愛の人と一粒種の息子とを相次いで失くすという悲運に見舞われ、悲しみに打ちひしがれた若い女に、今後も経済的援助は続けるが、家からは出て行くよう言い渡す。トーニは「探さないでください…手遅れです」(V.462)⁷という書置きを残して、姿を消す。クリスティーネと同様ドーナウに身を投げると推測されている。

なぜトーニがそれほどまでに忌み嫌われるのか。正式な結婚もしないまま男と同棲し、子供までもうけるような女は、上流社会の道德観からすると、ふしだらであり、汚れているからだ。フーゴーの忘れ形見とその母親だと思うから、母子はロザッティ家に受け容れられるばかりか、子供は可愛いがられさえするが、赤の他人の目には二人とも忌まわしい

⁷ Schnitzler, Arthur: *Das Vermächtnis*. In: *Gesammelte Werke, Dramatische Werke I*. Frankfurt a. M. 1981, S. 462. 以後 (V.数字) はここからの引用を指す。

存在でしかない。だから次々とロザッティ家に社交的交際を断ってくる。フランツが死んで、大切な忘れ形見の母親としての資格を失ったトーニは、ロザッティ家にとってさえ、もはや「大きな過ち」を犯した「罪」の女にすぎない。

「貴女はかつて過ちを犯した、… (愛人と子供を失うという大きな苦しみを受けたことで一引用者注) 貴女はすべてを償ったのだ! そのことを心の糧としてこのさき生きて行く上での力を得るのです!」(V.459) これは、左翼統一連合の集会に参加するほどリベラルな知識人ロザッティ教授の言である。

ロザッティ家の娘と婚約している医師のフェルディナント・シュミット博士は貧困層から身を起し、苦学して上流社会の仲間入りを果たした人物だけに、下層社会の何たるかを知っていると云い、これを別種の世界と呼び、トーニのような類の女がどんな生き方をするか分かっている、その存在によって許婚の「純潔(Reinheit)」が汚されるのを怖れる、トーニが出て行けば「この家の空気は再びキレイ(rein)になる」と言う。トーニに対しては、「私だって惨めがどういふものか知っていますよ。あんたよりもずっとね。われわれ男たちがそこから這い上がるのは容易じゃない。まっとうな人たちが義務とか道徳とか呼んでいるものを気にもかけない可愛い子ちゃんとは違ってね。この家ではそういったことに目をつむろうと一生懸命努力した。罪のない子供の母親ならどうにか赦してあげられる… あの子の死にはあんたと同じようにわれわれも涙した… しかしあの子は大いなる過ちの果実 (Irrtum) だったんだ。」(V.458)と言っている。

シュミットは不幸なトーニに対してあまりにも冷酷無情なるがゆえに、研究者から手厳しい批判を浴びせられるのが常であるが、しかし生半可に同情的で腰の定まらない他の登場人物たちよりも、彼の非情な発言の方により多くの真実が含まれているのを見逃がすことはできない。「フーゴーがもし死ななかったとしたら、若気の至りで結んだこんな関係なんかきつと自ら解消していたでしょう。自らの生活圈、品位ある上流社会から妻を娶ったでしょう、両親を愛し、この世の中で、世の中と調和して生きようとする若者たちはけっきょくほとんど皆そうしてますからね。」(V. 461)

確かにウィーン社会にあって、正式にトーニとフランツを妻子として認知し、ロザッティ家の籍に入れるのはほとんど不可能で、「もし死ななかったとしたら」、フーゴーはシュミットの言うとおりにしたか、もしトーニへの愛を貫くというのなら、アメリカのような新天地に渡って、ゼロから出発するしかなかったであろう。

フーゴーは都合よく死んだと言える。難しい課題をすべて家族に押しつけ、ゲタを預けられた形の一族の者たちは右往左往するしかない。彼は誰からも愛される好青年だったようだが、まだ親がかりの身でありながら町娘に子供まで産ませ、そのためトーニは父親が重病になった時も、私生児を連れた娘に会おうとしないので、けっきょく彼女は親の死に目にも会えなかった。すべてを秘密にしておいたために、十分な養育費も渡せないまま、劣悪な食や住環境に置かれた子供は病弱にしか育たず、夭折してしまう。

最も罪深いのは不人気なフェルディナント・シュミットではなく、人気者フーゴーだ。

しかし、未婚のまま同棲して母親になったトーニを「罪」の女と糾弾する人たちの誰一人として、同じ「罪」を犯したフーゴーを断罪する者がいない。上流社会の、しかも男子であることによって、すべてが赦される。

可愛い町娘の復讐 I アンナ・ベルクライン(『家族(Familie)』)

しかし可愛い町娘たちとて常に〈抗議の自殺〉に甘んじてばかりいるわけではない。

『戯れの恋』の三、四年前に書かれ、ほぼ完成していたにもかかわらず何故か正式の作品として認知されず、上演されることもなかった『家族(Familie)』(1891-93)という三幕ものの戯曲がある。

ブルジョワ(工場主)の御曹司エルンスト・モーザーは裕福な親族の死によって転がり込んだ遺産を使って、愛人の可愛い町娘アンナ・ベルクラインを伴い二年近くに及ぶイタリア旅行を楽しみ、資金が尽き果てたところで再びウィーンに舞い戻る。旅行中は故郷の町の間人関係のしがらみから解き放たれて、人目を気にする必要もなく、自由を満喫することが出来た。

しかし帰郷と同時に二つの難題が彼らを待ち構えている。一つはアンナが属する下層社会、特にその一族の低俗な環境によってアンナが毒されることへの不安、もう一つはエルンストの家族を含む上流社会のアンナに対する偏見と差別である。彼はアンナと結婚するつもりでいるが、結婚はおろか、このまま関係を続けることすら、社会的障壁に阻まれて危ぶまれる状況である。

アンナに対するエルンストの愛は変わらぬかに見えるが、家族の期待、周囲の目、社会の仕来りを見無視するわけには行かない。ウィーンの上層社会は彼を否応なくその枠組みの中に取り込んで行く。彼は旅行中アンナとずっと一緒に暮らすことで、彼女の生まれ育った下層社会の匂いと染みのある程度まで洗い落とすことに成功したと信じる事が出来た。帰郷しても彼はアンナを家族の許には返さず、知人の家に住ませる。

彼女は孤独である。エルンストだけ自らの家族とともに暮らし、彼女にはそれを許さないというやり方にも不満だ。けっきょく彼女は母親の許に帰る。しかしそこで彼女を待ち受けていたのはやっかみ半分の当てこすりや、愚にもつかない自慢話や、彼女の行く末を口先では案じるようなふりをして、その実、羨むべき関係が破綻に終わることへの期待を隠そうともしない人々の態度である。エルンストを取り巻く上流人士は彼女を見無視して挨拶もしない。一緒に散歩するのも大通りを避けて、暗い路地ばかり。

エルンストは一人前の男子として職業活動に従事し、しかるべき身分の娘と結婚するよう両親に促され、具体的に話も進められる。意地悪な喜びを隠そうともしない近隣の人たちの噂話に耐えきれなくなったアンナは、出入りを禁じられているモーザー一家にエルンストを訪ねて、噂の真偽を確かめようとするが、そこに来合わせたエルンストの父親から屈

辱的な扱いを受ける。彼女の姿を目にしたとたん彼は背を向けて「だめだ、エルンスト、いかんよ。…我慢ならん。こんなこと我が家では許さんぞ。」(F.147)⁸と言い、反発する息子との間で口論になったあげく、立ち去ろうとする。アンナが彼を呼び止めて、

アンナ：そんな(私を侮辱して追い出す[引用者注])権利はどこから来るの？ 私がいったい貴方に何をしたって言うの？ …貴方の家に私が何をしたって言うの？

モーザー氏：相手が誰だろうと、ふさわしくない者に対しては、立派なブルジョワ家庭(ein gutes bürgerliches Haus)への立ち入りを拒む権利はあると思うがな。

アンナ：じゃあそんな理由から…私を家に入れない…私に出て行けと言う…それなら、貴方はイの一番に奥様を追い出すがいいのよ！

(中略)

もしあんたが、品行の良い人とそうでない人の区別をそんなに上手におつけになれるとおっしゃるのなら、このゴリッパなブルジョワ家庭からあんたの奥さんを追い出したらどうなのよ。(F.148)

結婚前から平気で男とツキアウような下町娘を、まるで娼婦かなんぞのように、汚らわしいから出て行けと言うのなら、貴方は真っ先にご自分の奥方をこの家から追い出さなくてはならないはず、とアンナが開き直る時、彼女はモーザー夫人の秘密(オーストリア軍少尉との不倫関係)を知っていて、今それを暴こうというのである。「立派なブルジョワ家庭」の化けの皮を剥がし、奥方の不倫を暴いて、知らぬは亭主ばかりなりのモーザー氏を見返そうというのだ。

モーザー氏はショックを隠しきれないが、それ以上に取り乱すのはエルンストである。彼は既にこの秘密を知っていて、それがあからさまになるのを防ごうとする。

エルンスト：僕の母なんだぞ。

アンナ：それが何だって言うのよ？ たまたま親子ってだけのことじゃない。私と貴方の仲の方がずっと神聖なんじゃなくって？ 耳にタコが出来るくらい私にそう言い聞かせたのは貴方じゃないの！ 私はじゅうぶん虐められたわ…もうたくさんよ、あんまりだわよ。(中略)ここはヒンカクある家だ、お前みたいな女は出て行ってもらうって、威張り続けさせる気？

(中略)

エルンスト：お前は謂われない侮辱に逆上して…復讐しようとしたんだ…

(中略)

⁸ Schnitzler, Arthur: *Familie*: In: Aus dem Nachlaß. Entworfenes und Verworfenes. Frankfurt a. M. 1977, S. 147. 以後 (F.数字) はここからの引用を指す。

お前は父を破滅させ、母を破滅させ、この家の平和をぶち壊した。お前の一言でわれわれ二人は恐るべき罪をしょい込むことになったんだ。

アンナ：背負いましょう、よろこんで背負いますよ。貴方のお母さんが来てくれさえしたら！面と向かって言ってやれたらどんなにスーッとするかしら。きっと私のことをバカになさるでしょうよ、息子の情婦、まあ、何てことでしょう、こんな女、息子はきっと飽きが来るにきまつてるわ。こんな女と結婚なんかするもんですか！…そんな女がよくもまあぬけぬけと顔を出すなんて！…でも私言ってやるわよ、奥様、私は貴方のご主人さまに追い出されたりはいたしませんことよ、奥様とご一緒なら別ですけどね！
って。(F.148f.)(傍点引用者)

彼女がここまで怒り狂うのは、モーザー氏の傲慢な差別的態度もあるが、道徳や品位をウリにする上流家庭の嘘っぱちで空疎な実態と、その偽の仮面に気付かぬ愚かさ、気付いていてもなお真相を覆い隠して、表だけでも家庭の平穩無事を守り続けようとするブルジョア根性に我慢がならないからである。彼女の怒りの射程には、口先の論理と実際の生き様がまるで違うエルンストも入っている。

彼がアンナを無理やり連れ去ろうとするところへ、帰宅した母が父と一緒に入ってくるのを見て、いたたまれなくなったエルンストは逃げ去る。

いったい何の騒ぎか、と問うモーザー夫人に、

アンナ：貴方の御主人は私を追い出そうとしたのよ、それで私言ってやったのよ。

夫人：で、何て？

アンナ：喜んで出ていきますよ、でも貴女もですよ、奥様、貴女もご一緒に出て行くのです。どうしてか、理由はお分かりのはずよ。(F.150)

シラを切る夫人と押し問答の最中、エルンストが窓から中庭に身を投げたことが知らされる。

モーザー氏：じゃあやっぱり…息子は知ってたんだ！

モーザー夫人：ことの次第を悟って、くず折れる。…幕 (F.151)

ここで身を投げるのは「可愛い町娘」ではなく、貴公子の方だ。彼は家族と恋人の板挟みで死んだのではなく、ブルジョア青年の思い上がりで自己欺瞞の罪を贖ったのだ。

この戯曲では、世紀末ウィーンの差別的な社会構造や、紳士淑女たちの意識の実態、上流家庭の糊塗された平穩無事の欺瞞性が容赦なく暴かれているが、それだけではない。

下層社会についても、ありのままの姿が写し取られている。

アンナの姉もかつては可愛い町娘として貴族の子弟の愛人だったが、別れる際に相当額の慰謝料をもらった。この金目当てに結婚したのが今の亭主で、それを元手に商売を始めたが、必ずしもうまく行っていないらしく、それをユダヤ人のせいになっている、そういったことが、さりげない家族たちの会話から聞き取れる。アンナの幼友達は今や地方の女優で、金持ちのパトロンに家まで買ってもらって、かなり羽振りがいいらしい様子が、曖昧にぼかされた話しぶりから推察される。アンナも富裕な老貴婦人のお伴で二年近く南欧を旅したことになるが、表では話を合わせても、そんな嘘を信じる者は誰もいない。彼らの会話や態度から透けて見えるのは、見栄と嘘とやっかみと相手が不幸になることへの意地悪な期待ばかりである。

上流下流とも、身分制社会の闇は深く、安直な民主思想やヒューマニズムでは歯が立たない。この芝居は上演しようとすれば出来るだけの完成度に達していたはずだが、お蔵入りとなったのは、あまりに自然主義的で赤裸々な真実が暴かれていて、ワルツやオペレッタに酔い痴れる世紀末ウィーンの空気に馴染まなかった、ということか。

可愛い町娘の復讐Ⅱ レオポルディーネ『夜明け前的一幕(*Spiel im Morgengrauen*)』

Spiel im Morgengrauen (1927)は「夜明け前の賭博」と訳すべきかもしれない。しかし賭博以外にもこの作品では決定的な出来事がすべて未明に起きることや、身分的な偏見・差別や身分制秩序の終焉の兆しがテーマで、身分制社会の夜が白み始めて、新時代が訪れる直前の出来事を扱っていると考えられるところから、「夜明け前的一幕」とする。

主人公はヴィルヘルム・カスダ少尉、相手はレオポルディーネ・レーブス、現在は少尉の叔父と結婚してヴィルラム姓を名乗る。

レオポルディーネはかつての「可愛い町娘」、下町のカフェで花売りをしながら、半ば街娼に近いことをやって暮らしを立てる「可哀そうな町娘」だった。その当時カスダ少尉は彼女と一夜を共にしたことがあったが、そのような身分の者に対する偏見から、相手の真摯な気持ちに気付かず、彼女の真心を無視して、愛の行為をお金で買うという心ない仕打ちをしたことで、彼女を深く傷つけてしまった。むろん少尉はそんな娘のこともその早朝の一件もとっくに忘れてしまっていた。

数年後、彼は賭博に負け、1万1千グルデンという莫大な借金を作ってしまう。将校にとって賭博の借金は24時間以内に返済することが「名誉規定」で定められていて、返済がかなわなければ、自決して恥を雪がねばならなかった。カスダ少尉は数年前から付き合いの途絶えていた金持ちの叔父ローベルト・ヴィルラムの許を訪ねて助けを請うが、けっきょく、叔父と結婚して今や全財産を管理運用しているレオポルディーネの慈悲にすぎない立場にあることを悟らされる。

カスダ少尉に相談を受け、その依頼に対する返事を持って兵舎に少尉を訪ねた彼女は彼のベッドで一夜を過ごし、帰り際に千グルデン札一枚を手渡して、少尉の期待を裏切る。

彼はなりふり構わず、必死で、

「これじゃ少なすぎるよ、レオポルディーネ、千じゃないんだ。昨日きつと聞き間違えたんだよ、ぼくが頼んだのは1万1千なんだ。」(M.573)⁹

「ああそう、そりゃ見当違いよ…」蔑むようにちょっと紙幣の方へ顎をしゃくって、「あれとは関係ないのよ。千グルデンは貸すんじゃない、あげるのよ—昨夜の報酬にね。」

ヴィリ(ヴィルヘルム・カスダ)が怒りに震える様子を興味津々で見ているが、「少なすぎるってことはないでしょ。いったい幾ら貰えると思ってたわけ。千グルデンよ。あの時あんたが私に呉れたのはたったの10グルデン、まだ覚えてる?(中略)わたしはあの時もっと欲しかったってわけじゃないのよ。10グルデン…それで十分、多すぎたぐらいよ。(中略)正確に言えば、ちょうど10グルデンだけ多すぎたのよ。」(傍点引用者)(M.573)

彼女は彼を愛していた。彼は愛を金で買うことによって彼女の真心を無視し、踏み込んだのだ。彼はまじまじと彼女を見つめ、目を落とし、ようやくのみ込めてきた。

「知らなかったんだ。」

「分かったはずよ。そんなに難しいことじゃなかったはずよ。」(M.573)

あの時の情景が彼の脳裏に蘇って来た。

他の女の口からはけっして漏れたことのない愛の言葉、不思議なくらい身も心もゆだねきって、まだ少女っぽいほっそりした腕を彼の首に絡ませていたこと。彼女の優しさは、それまでどの女との間でも体験したことのないものだった。「一人にしないで、私はあんたが好きなの。」(M.574) 忘れてしまっていたが、他の女からは聞いたことのない言葉だった。それがようやくいま彼の耳の奥に蘇ってきた。

それなのに彼はあの時、ちょうど今日彼女がやったように、無造作に、相手がまだ甘い疲れの中でまどろんでいる様を横目に見ながら、もっと小さな札でも間に合うかもしれないが、などどちらっと思いはしたが、気前よく10グルデン札をナイトテーブルに置いて、まだ半ば眠りの中にいる娘の不安そうな眼差しを背中に感じながら立ち去ったのだった。兵舎でベッドにもぐりこんで二三時間休息するために。そして朝、勤務に就く頃にはもう一介の花売り娘のことなんか忘れてしまっていた。

彼のほとんど無意識的な偏見と差別による侮辱的振る舞いによって彼女は深く傷つき、今、その悔しさ、屈辱を晴らそうとしているのだ、ということもようやくのみ込めてきた。

確かに、「昨夜の報酬」と聞いた瞬間は、まるで彼がお金のために夜の相手をしたと言わんばかりの彼女の言動に怒りがこみ上げてきた。金と引き換えに女の相手を務めるホスト野郎みたいにおれを扱うとは。そんな言語道断な侮辱の上にさらに、娼婦のテクニクに幻滅した色町の客よろしく、取り決めておいた報酬をケチるようなまねまでして生意気千万にもおれを嘲るのか。もし色事の報酬として金を手渡すというのなら、たとえそれが

⁹ Schnitzler, Arthur: *Spiel im Morgengrauen*. In: *Gesammelte Werke, Die Erzählenden Schriften II*. Frankfurt a. M. 1981, S. 573. 以後 (M.数字) はここからの引用を指す。

1万1千グルデンでも、彼女の足元に投げ返してやる…。しかしその台詞も握りしめた拳も力なくどこかへ挫け去ってしまう。彼にとって救いを意味する金額を提供してくれる女とであれば、誰とでも寝たであろうことに彼は思い至ったのだ。

事実、お金の話もしないまま、9時に大事な会議があるので、と言って立ち去ろうとする彼女を追いかけようとした時のカスダは下着一枚で、何年か前に田舎町の売春宿で一人の娼婦が金を払わずに立ち去ろうとする客の男に追いつがるのを見た、その情景を思い出し、つい今の自分をその娼婦に重ね合わせてしまったのではないか。(M.572)

一人の怒れる女が彼に対して行った残酷な仕打ちが、「彼の最も深い本質(sein tiefstes Wesen)に向けられた」「正義の裁き(Gerechtigkeit)」(M.575)にほかならないと、心の奥底で実感し始めていた。

叔父のローベルト・ヴィルラムが妻のレオポルディーネから託された1万1千グルデンを持って駆け付けるが、時既に遅く、少尉が自決した後である。相手が名誉ある将校の身分であるいじょう、この結果はじゅうぶん察知できたことなので、この措置はレオポルディーネのアリバイ作りにすぎなかったのではないか、という疑いが残る。

ともかく、未発表作品『家族』と同様、この小説が「可愛い町娘」の復讐を主題としていることは疑う余地がない。と同時に、これは下剋上の文学でもある。

父親以上に年の違う叔父と彼女の関係にしても、若い女としての魅力を武器に裕福な叔父の心を虜にして結婚したが、毎年夏二週間の休暇を二人きりで田舎で過ごす以外は別居生活で、逢うのは週一回、夫婦なのにそれ以外の面会は許さない。全財産は彼女が管理し、経理の才を活かして、資産をさまざまな事業に投資運用している。叔父はそこから入る利子の12.5パーセントを月二回に分けて与えられ、それで生活している。前借りは厳禁。叔父がその取り決めで違反しない限り、彼女は実に忠実に約束を履行する。叔父は完全に彼女の支配下にある。

カスダ少尉が最初に出会った時のレオポルディーネは、真っ赤な服、首に青いスカーフを巻いて、ブロンドの髪をろくに整えもせず、胸が痛むほどあどけなく蒼白い顔をしていた。彼女を連れ込んだうらぶれたラブホテルでは、粗い麻織りのカバーから赤の地が透けて見えるクッション、傷みの来た木製の緑色のブラインド、彼女がベッドの中から差しのべた右手の薬指には紛い物の宝石をあしらった細い金の指輪が見えた、そういったことが記憶に残っている。

しかし彼が金の無心に訪れた時のレオポルディーネは弁護士の応接室のような部屋に彼を迎え入れ、恰幅もよく、きっちり髪も整え、鼻眼鏡を掛けている。今や彼は相手に奥様(gnädige Frau)と呼び掛け、どんな担保があるかと聞かれて「自分は将校です、奥様」と答えると、「商慣習では(nach geschäftlichen Usancen)そんなことは何の保障にもなりません。貴方の保証人は誰ですか」と切り返されて、うな垂れるしかない。(M. 561)

金銭の支配する場では将校という名誉ある身分など一文の値打もないのである。生れや

地位に基礎を置く身分制社会から経済力を基盤とする資本主義的階級社会への転換をこれほど容赦なく告げ知らせる場面も珍しいのではあるまいか。

しかしヴィルヘルム・カスダは依然として名誉の掟に支配された社会の枠組みに囚われたままで、自分が返済を迫られているのは「信用貸し[名誉の懸かった負債] (Ehrenschild)」であり、「名誉の喪失(die Ehre verloren)」 (M. 562)が将校にとって何を意味するかを懸命に訴えようとするが、めぼしい反応など得られるはずもない。

兵舎を訪ねて来た時の会話で彼女に、幸福かと尋ねると、彼女はぼんやり前を見ながら「だと思わ。何よりもまず私は自由な人間なの。これこそ私がいつもいちばん願っていたことよ、私は誰にも隷属なんてしていないもの…殿方と違ってね。」(傍点引用者)するとヴィリが「そりゃ有難いことにぼくも同じだ、それだけが取り柄さ。」 (M. 570)と答える。彼女は明らかに少尉や叔父をあてこすって言っているのに、彼は勝手に、自分が独身で家庭に縛られていない、という意味に取ったのだ。実際はこの時の彼ほど他人に隷属する立場の人間はいない。カスダ少尉の自己中心的な能天気ぶりが暴かれる場面である。

資産家の叔父ローベルト・ヴィルラムも名誉ある少尉ヴィルヘルム・カスダも今や、かつての「可愛い町娘」、みじめな境涯の「花売り娘」だったレオポルディーネの商才と経済力の前に跪くしかない。

思い上がった上流社会への復讐という点で言えば、シュナーベル某も同じで、今は南米の小さな共和国の「領事」で、「豪商」と言われているが、仄暗い過去を持つ謎の人物。彼は「グライジング少尉」という具体的な名前を挙げて、「何もかも承知の上で初心な町娘の健康を危険にさらし、病気をうつし、死に追いやるような人間を、身分的名誉をそれほどまでに重んじる方々が、どうして仲間内に留め置くのか、まったく理解に苦しむ」 (M.538f.)と、名誉ある将校たちへの批判と憤りを露わにする。

このシュナーベル領事こそカスダ少尉に多額の金を信用貸し(Ehrenschild)して賭博を続けさせ、返済不能の負債を負わせてしまった人物で、少尉を計画的に破滅に導いたとは言えないにしても、相手に危険を知らせて途中で切り上げるくらいの配慮は示せたはずだが、帝国の名誉ある将校たちの横暴への復讐として、「何もかも承知の上で」一少尉の名誉と地位と命を「危険にさらし」、ついには「死に追いや」った、ここでなされたのは身代わりの復讐ではないか、といった推測だってじゅうぶん成り立つ。

『夜明け前的一幕』は『家族』と同様、身分的思い上がりに対する復讐の物語であるが、同時に、かつての農奴ロパーヒンが「櫻の園」のお屋敷を手に入れるのと同じく、世紀転換期に進行しつつあった身分制秩序の解体と序列の流動化という時代的な変化をも忠実に映し出している。

Selbstmord und Rache des süßen Mädels

Die Wirren der Ständegesellschaft, dargestellt in Schnitzlers Literatur

Tomotaka TAKEDA

Christine (in *Liebelei*) ertränkt sich in der Donau, nicht nur weil sie ihr Geliebter Fritz, ein junger Mann aus gutem Haus, hintergeht, indem er sich um eine Dame aus der vornehmen Welt mit deren Mann duelliert und dabei stirbt, sondern auch, weil man sie ignoriert, von der Trauerfeier ausschließt und sogar davon abhält, sein frisches Grab zu besuchen, wie es die Sitte der damaligen Ständegesellschaft verlangte. Ihre Frage „Was bin denn ich?“, die sich sowohl gegen den untreuen Freund als auch gegen die Kaltherzigkeit des stillschweigenden sozialen Einverständnisses richtet, klingt entrüstet. Bei ihrem Selbstmord handelt es sich eher um einen Protest als um eine Verzweiflungstat.

Nicht anders ergeht es Toni (in *Das Vermächtnis*), die nach dem plötzlichen Tod des Geliebten mit ihrem unehelichen Buben als dessen Mutter in seine Familie aufgenommen wird, aber bald, nachdem das von ihm hinterlassene Söhnchen gestorben ist, als unreines Mädel aus der Unterschicht weggehen muss und sich in der Donau ertränkt.

Nicht alle „süßen Mädels“ sind aber so selbstzerstörerisch. Anna Berglein (in *Familie*) führt einen Gegenangriff gegen die Diskriminierung durch die bessere Gesellschaft. Sie rächt sich, indem sie den Bourgeois anschreit, der sie, die Geliebte seines Sohnes, als unwürdiges Mädel aus seinem „guten bürgerlichen Haus“ hinausweisen will, er solle aus diesem „sittenreinen“ Haus lieber zuerst seine eigene Frau hinausjagen. Sie deutet damit eine geheime Liebesbeziehung der Dame an, was nicht nur den Ehemann, sondern auch den Sohn, ihren Freund, so erschüttert, dass sich dieser, verzweifelt über das Zerbrechen der friedlichen Fassade der Familie, in den Hof hinunterstürzt.

Leopoldine (in *Spiel im Morgengrauen*), die einmal als kleines Blumenmädel mit Leutnant Kasda geschlafen hat, ist durch sein gefühlloses Benehmen tief beleidigt worden. Er hatte ihre gefühlvollen Worte „Laß mich nicht allein, ich hab’ dich lieb“ einfach überhört und für ihre echte Liebe zehn Gulden bezahlt. Das Vorurteil hindert ihn, einem Mädchen von niedrigem Stand eine selbstlose Liebe zuzutrauen. Nach Jahren findet sich Kasda dann in der peinlichen Lage, sie, jetzt mit seinem reichen Onkel verheiratet und eine tüchtige Geschäftsfrau, um ihre gnädige Hilfe bitten zu müssen, um seine enormen Schulden zurückzuzahlen. Sie besucht ihn in der Kaserne, schläft mit ihm und gibt ihm dann tausend Gulden, ein Elftel der nötigen Summe, indem sie ihn an die fatale damalige Nacht erinnert und sagt, die gebe sie ihm—,„für die vergangene Nacht.“ Was die Ehrenschild angeht, so muss sich der Leutnant, wenn die Rückzahlungsfrist überschritten ist, erschießen.